

意味論における文脈主義について

高谷遼平

慶應義塾大学

文脈主義をめぐる論争の主な争点は、「発話された文の真理条件的内容の決定において、文脈の影響とはいかなるものか」というものである。指標詞以外の表現の意味論的内容を決定するためにも文脈が必要であるということは、数ある文脈主義共通の見解だが、文脈の影響というものがいかなる程度で、いかなる仕方なのかという点は、いまだ一致をみない。例えば、

1. *It is raining.*

この文の真理条件的内容を決定するためには、何が必要だろうか。多くの論者によれば、天気についての発話の場合、その文の真理条件的内容には場所が含まれていなければならない。文(1)についても、その真理条件的内容を得るためには、雨が降っている場所を特定する必要があるが、発話されたこの文には場所を示す要素が含まれていない。したがって、何らかの語用論的プロセスによって場所が加えられることになる。

スタンリーら穏健(moderate)な文脈主義者によれば、‘rain’という表現は、その論理形式において場所を示す変項のためのスロットが用意されている。雨の降っている場所を示す表現が文自体に存在する場合、そのスロットは明示的に埋められ、文(1)のように場所を示す表現が存在しない場合は、発話文脈を参照することによってそのスロットは埋められることになる。つまり、真理条件的内容を決定するために文脈が必要となるのは、表現自体の論理形式のレベルで、文脈がいわば要請されているためだと穏健な文脈主義は主張するのだ。一方、レカナティをはじめとする急進的(radical)な文脈主義者によると、‘rain’という表現が論理形式のレベルにおいて場所を要請しているということはない。文(1)の真理条件的内容を決定するために場所が特定されなければならないとするのは穏健な文脈主義と同様だが、場所がこの文の真理条件的内容に含まれるのは、表現自体ではなくむしろ純粋に文脈のみによって要請されるためだと考えるのだ。言い換えれば、表現自体に要請される範囲を超えた文脈の影響を認めるのが急進的な文脈主義ということになる。

本発表では、まず穏健な文脈主義と急進的な文脈主義について簡単に概観した後、急進的な文脈主義者の代表格であるレカナティとカーstonに焦点をあて、両者の理論を比較していく。レカナティが伝統的な意味論の上に新たな理論を構築しようと試みている一方、カーstonは関連性理論の観点から急進的な文脈主義を支持しており、両者が用いる諸概念の関係性を探ることは、非常に有意義であろう。具体的には、文の真理条件的な内容と含意がいかに区別されるのかという問題や、表現の論理形式に依存しない文脈の影響はいかなるプロセスで生じるのかなどを考えていくことで、両者の相違点を明らかにしていきたい。